

## // 巻 頭 言 //

日本ライトハウスきらきら  
部長 市川 としみ

日本ライトハウスの門をたたき、歩行養成を修了し、視覚障害関係の仕事に就いてから20年になる。たくさんの視覚障害の方々と過ごしてきた。その道の先輩方にもたくさんお世話になり、今の私がいると、実感している。

もともと視能訓練士をしていたこともあり、ロービジョンのケアの担当を長くしていた。生活訓練の形態も制度も新人だった頃からすると様変わりし、視覚障害を持った方のお一人がどのように生活していけるのか、全般を考え、利用者の担当として1つの訓練項目の担当をするだけでなく、これからの生活の力をつけてもらうような支援をするように変わってきている。

医療関係の経験者ということもあるせいか、看護師の担当をたくさん受け持たせてもらっている。復職された方、あん摩・鍼灸の資格をめざし進学される方、様々で、同じ看護師という資格を持っていても本当にいろんな方が（当たり前だが）おられる。以下に紹介する『つれづれなるままに～お菓子の魅力～』を書かれた中島千恵様は、今回担当させて頂いた方だが、私を初心に戻してくれる力を持った方だった。まだ、視覚障害になり、苦しい気持ちから抜け出さずにいらっしゃるところだが、一緒に考え、抜け出す力をつけていきたいと考えている。中島様の思いを紹介したい。

『つれづれなるままに～お菓子の魅力～』 中島千恵

私の38年間の中で、お菓子にまつわる素敵な話が2つある。『枕草子』ではないが、つれづれなるままに書いてみたい。

私は5歳の時に、肺炎で5日間入院した。しんどい、痛い思いをたくさんしたと思う。母と離れて、淋しかったと思う。今はマイナスの感情は、覚えていない。むしろこの入院が、神様からの最高のプレゼントに思う。何になりたいのか、何をしたいのか分からない人が多い中、私は5歳で、ナースになるとい

う人生の道標の光を見つけたからだ。それがどれほど大きな光だったか思えるのは、2014年に自己免疫網膜症で視力を失い、当たり前に出ていた事が出来なくなり、惨めで情けなくて、心の中は自己嫌悪と絶望と喪失感で溢れている。同時に、人生の道標の光も失い、暗闇にいる私だから思えるのかもしれない。

この入院で、あこがれのナースに出会ったかというのと、そうではない。記憶にあるのは、3時になると、ナースがお菓子を持って来てくれたことだ。それがとても待ち遠しくて、嬉しかった。それ以降、私もこんな仕事をして、喜んでもらえたらいいなという夢が出来た。大人になって、ナースの仕事は、お菓子を配るだけではなく、命に関わる大変な仕事だと分かって、夢は変わることはなかった。

私は、不器用で要領が悪く、争い事が嫌で、心を抑えてしまい、思いが言えなかったり、うまく自分を表現出来ない。そんな私がナースになるのは、簡単ではなかった。

臨床実習も終盤で、合格が出来なかった。とりあえず、国家試験は受け、再実習を受けたが、合格出来なかった。同期と一緒にナースになれず、とても悔しい思いをした。半年間の追加実習で合格し、再度国家試験を受け、みごと念願のナースになれた。

実習中に患者が亡くなる体験もした。前日まで話をしていた人が、翌日の朝にはいないという現実を知り、泣きながら、何も出来なかった自分に無力感を感じ、命の空しさを感じた。小児科実習では、小児癌の子を受け持った。その子は、痛い検査も泣かず、口下手な私ともよく話をしてくれる陽気なかわいい子だった。ある日、その子が亡くなったと聞いた。すごくショックで、神様は何でこんな小さな子の命を取るんだろう、何で人は病気になるのかと思った。ナースになる前に、患者が2人も亡くなるのは、まれな体験だと思う。繊細な心の持ち主なら、鬱病になったりして、ナースになれなかったと思う。どこか鈍感で、その日その日が精一杯だった私だから、続けられたと思う。

ナースになってからも、ナースの仕事は激務と言われるように、正確な勤務時間を調べると、過労死してもおかしくないほど、残業が長く続く日もあった。患者の為より、業務をこなすのに必死の毎日が続くと、何の為に仕事をしてい

るのか分からなくなる日もあった。衝撃的な患者の死にも合い、ショックを受け、生死について考えさせられた。もうしんどい、もう辞めたいと何回も考えた。しかし、ナース以外に魅かれる職業もなく、ナースを続けてきた。

こう振り返ってみると、苦労はたくさんしたが、改めてナースの仕事が大好きだと実感する。しかし、目が悪くなる前は、不平不満を強く持ち仕事をしてきた。すごくしんどかった。帰宅の道中で、自然と涙が出る日もあった。今思えば、ナースの仕事が出来るだけで、すごく幸せなことだったと思う。感謝出来ない私に、神様がこのままでは駄目だよと、気付かせてくれたのかもしれない。また、ナースであることが、私というアイデンティティーを作っていたと思う。そう考えると、ナースになると思った5歳の入院は、すごいプレゼントだった。神様に感謝。また、お菓子の力はすごい。

2つ目の話は、高校時代の話だ。私は、バイト先で出会った子に恋をした。その子は、人のいない所に私を呼んでは、チョコレートなどのお菓子をプレゼントしてくれた。特別扱いしてくれる感じと、秘密めいた感じがとても嬉しかった。ある日、その子が「頭切る手術するから、明日から休むな」と、いつもと同じ様子で言ってきた。私は「そうなんや。頑張って」と答えた。手術後も、いつもと同じで明るく頭の傷を見せてくれた。20代半ばだったと思う。その子が、亡くなったと連絡があった。すごくびっくりした。今思うのは、その子は、病気と手術の話聞いた時、どんなに不安で怖かっただろう。もしかしたら、自分の命が短いかもしれないと感じた時、何を考えたのだろう。何であんなに取り乱すことなく、周囲の人と明るく振る舞えたのだろう。すごい子だと思う。好きになって本当に良かった。それに比べ、目が悪くなり、生きる気力もなく死ぬ勇気もない私は、時折取り乱しては、周囲の人を困らせている。その子は、どう思うだろう。天国で会った時に、恥じない生き方をしないとけないと思う。

今までの私は、忙しくて、自分の事を振り返り文章にする気は全くなかった。このように書いてみたいという気持ちにしてくれたショートステイに感謝。つれづれなるままに書いて、今が最も辛く、この壁は乗り越えられないと思っているが、38年間大変な思いをたくさんして、その時々のハードルを乗り越

えてきたと思えた。まずは、「38年間よく頑張ってきたね」と自分を褒めたい。目が悪くなり、18年ぶりに母と同居し、親子の時間を再び過ごしている。仕事をしていれば、会うこともない人達と、たくさん出会っている。ケアをしていた立場から、ケアを受ける立場になり、戸惑いや抵抗感もあるが、今まで感じたことがないほど、人の優しさと温かさを感じている。今はまだそう思えないが、この経験も神様からのプレゼントだと思う日が来るのだろうか。

2015年に、保護犬になった犬を飼い始めた。その子は、母と父と私の間を取り持つ潤滑油の役目をする大切な存在だ。その子の名前が『タルト』だった。やはり、お菓子とご縁があると思う。今は何が出来て、どう生きるのか全く分からない。世の中から取り残されそうな孤独感や、不安で心が押し潰されそうで、死にたくなることがある。これから先もお菓子にご縁をもらい、人生の道標の光を見つけていけるのだろうか。それにしても、文字を見ずに音を頼りに文章をかくのが大変で、疲れるのを知った。これも良い経験だったと思う。コーヒーのいい香りの中、お菓子を食べ、一休みしたい気分だ。お菓子の食べ過ぎで、太らないように注意したい。

#### 《インフォメーション グッズ》

##### ボイス電波腕時計

電波受信機能を搭載した日本で初めてのアナログボイスウォッチ（非防水）。ワンプッシュで時間と日づけの確認が可能。音声はプロ女性アナウンサーの肉声を採用し、聞き取りやすい。「もっとおしゃれな腕時計が欲しい」という声のもと開発され、デザイン性も高い。ベルトのラインナップは、皮革、メタル、伸縮モデルなど複数。

問い合わせ先：日本ライトハウス情報文化センター TEL 06-6441-0039